

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第126号(通巻第186号)
2014年6月5日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山
複合施設 301 tel&fax042-376-4572(事務局員は常
駐していません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

“真夏”の環境行事となった大栗川の観察会



17年目の環境行事となった「川の生き物調査・観察会」が6月1日(日)に、多摩川との合流点付近の大栗川で行われた。参加の親子連れは、今回初めて80人の募集

過去最高の参加者が川に入った。枠に対してフルの申し込みがあったものの、実際には2家族が欠席で72名。

ただ、この日は朝からカンカン照り。気温も急上昇するなかでの開催となり、主催者の環境行事実行委員会は急拠、参加者の日陰対策として芝生の上に敷いていたブルーシートを、野鳥観察小屋の柱を利用して屋根代わりに2mほどの高さに張り直す措置をとった。

午前10時までに集合した参加者は4班に分けられ、それぞれにボランティアの班長とサポートのスタッフなどがついて、水のなかの行動を行った。

川に入る前に、講師の加藤岑夫さんが河原に生える



加藤講師の話に興味深そうに聞く。加藤講師も「キミたちよく知っているなあ」と感心することしきり。

植物を採ってきて、人や動物の足などについて種が広く分散される植物の生き残り方などを説明した。加藤さんが子どもたちに質問すると、子どもたちの

正確な答えが返ってきて、

11時に待望の大栗川に入水。最初に入ったグループは、すぐ右岸のほうに移動。あとから入ったグループは左岸とそれぞれの場所でガサガサを行い、川面には「とれたー!」という子どもたちの元気の良い声が飛びかった。

さて、水生生物たちが収集された結果は、西田一也

講師などによって分析され、ニゴイ、アブラハヤ、コイ、フナ、ナマズ、ドジョウ、シマドジョウ、コクチバス、ハグロトンボとサナエトンボ



のヤゴ、タイコウチ、カワリヌマエビなど12種類だった。

これらの一部は環境週間ということもあり、市役所の玄関などに展示される。

なお、この日の水温は23.7℃、採れた魚の話を聞く子たち化学的酸素要求量のCODは2で、水質がよい部類に入ることがわかった。また、炎暑下で参加者が多かったわりに、事故や体の不具合を訴えるような人も皆無だったことは喜ばしいことだった。



ごみゼロ(530)デーで新組織のキャンペーン

多摩市まち美化推進協議会は、これまで単独で8月と2月に駅頭キャンペーンなどを行ってきたが、今期からほかの団体(廃棄物等減量推進員/たまごみ会議など)永山駅の参加者は93名にのぼると合同で「まち美化とごみ減量を合わせたキャンペーン」を、まず5月30日の「ごみゼロデー」に合わせて行うことになった。



初日の5月22日は多摩センター駅周辺の予定だったが、午後に雷雨があり、午後4時スタートの予定だったため中止となった。23日は小田急線の唐木田駅周辺で27人のボランティアがキャンペーンに参加。

24日は土曜日のため、永山駅周辺が午後1時スタート、聖蹟桜ヶ丘駅周辺が午後3時スタートで行われた。永山駅では昨年も聖ヶ丘中学校のサッカー部の部員たちが赤いユニフォームで参加してくれ、大いに目立ったものだが、今年は副校長先生以下40人ほどの男女生徒たちが参加してくれ、キャンペーン参加者は93名に膨れ上がった。昨年の多摩センターに次ぐ人数。

永山駅と聖蹟桜ヶ丘駅では阿部裕行市長も駆けつけてくれ、マイクを握って駅周辺の通行人らに、まち美化とごみ減量を訴えた。桜ヶ丘のボランティア参加者は48名で、今回のキャンペーンの全参加者は3カ所合計で約170人。これにより市民への浸透がより深まるのではないかと思われ、次回の11月がまた楽しみになってきた。

(写真は市環境政策課提供) 桜ヶ丘駅では阿部市長も参加



「さえずりの森」の看板がリニューアル

永山駅の西側に広がる「さえずりの森」には、これまで駅側に向けてダークグリーンに白抜き文字の看板が建てられていたが、8年もたつてひび割れなどが目立つようになったため、5月28日の作業日にライトグリーンに白文字の看板に改修が施され、すっかりリニューアルした。



原発に頼らぬ社会へシフトは可能か？(上)



熱弁をふるう田中優氏

恵泉スプリングフェスティバル 2014 では、5月31日に標記のような趣旨のシンポジウムが開かれた。ここで講演したのが、地域での脱原発やリサイクルの運動を出発点に環境、経済、平和など様々なN

GO活動に関わってきた田中優氏(未来バンク事業組合理事長)。氏の講演内容を今号と次号の2回に分けて掲載する。以下は「原発なくても大丈夫編」。

電気消費の実際を家庭消費と事業消費について考えてみたい。みんなのライフスタイルの問題だから、みんなが電力消費を抑えれば原発に頼らなくてもいい社会になる、というのはウソ。なぜなら事故前のことだが、家庭の消費は22%、家庭以外の消費は78%だった。

その最たるものは産業用特別高圧という高圧線が直接工場に入るようなところ。そういった大工場が消費電力の3分の2を食っている。だからもしライフスタイルを改めるのであれば、産業界が改めるべき。家庭がすべて電気消費を抑えたとしても問題は解決しない。ライフスタイル論でごまかされるが、実際はそんなことはない。

夏場になるとピーク時に電気が足りなくなるという。ではピークの時ってどのくらいあるのだろう。気温などのグラフで見ると、夏の平日の日中、午後1時から3時ごろにかけて気温が最高になった時。2010年という気温が33.8度を超えた時しかピークは出ていない。だから、四六時中、電気が足りないわけではない。

事故の直後に「計画停電」があった。あれは大半は脅しだった。なぜならピークが出ない。土日って家庭の消費は増えるが産業が止まっているので電力消費が少ない。それなのに土日にも計画停電をやったが、これは必要なかった。「お前たち、原発が止まったらどうなるのかわかっているのか！」という脅しのようなものだった。

2010年も2012年も同じようなピークのパターンになっているが、ひとつ大きな違いがある。それは15%も消費が減っている点だ。なぜか、みな省エネ製品に変えてしまったから。その省エネ効果だが、日本の蛍光灯器具は裏側に反射板がついてないから、裏側が光っていても天井から反射されるのは30%台。ところがヨーロッパに行ってみると裏側はみんなピカピカのステンレス板。なんと1本で2本分光る。照明の電気消費を半分にできる。

東京で圧倒的に電力消費を伸ばしたのはオフィス。そのオフィスの消費の45%はエアコンだ。電気消費は時代とともに減っているのだが、ガスヒートポンプ・エアコンを使うと消費は10分の1になる。その分ガスを使うが、ガス代は電気を使っている時と比べれば3割以上安い。ということは7年もたてば元がとれて、あとは黒字になる。城南信金などはこれに優遇融資しているほどだ。

つまり、45%だったものが4.5%に減る。オフィスの照明器具は21.4%。それをLEDなどに変えれば半分に減る。



だから全体の消費を半分に落とすことは簡単。もう電気消費は上がらないという時代に入っている。つまり、電気消費が



関西電力・大飯原子力発電所 増えているなんていうのはウソで、省エネが進んで電気がなくてもやっていける時代に入っている。

2012年の夏に関西電力の大飯原発の3、4号炉が強引に稼働したわけだが、その時に電力会社はこういった。「夏場のピーク時に電気が足りないので、原発を動かすしかないのだ」。しかし答え合わせをすると、電力会社は落第。全社が消費量に過大な評価をしていた。彼らがこれだけ電力が必要だといっていたのだったが、実績を比較すると805万kWも余剰だった。大飯原発を強引に稼働させて236万kW。それを引いても550万kWぐらい残る。だから大飯原発を強引に動かす必要はまったくなかった。

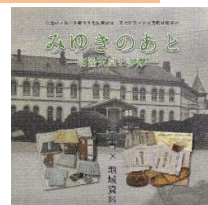
今度、裁判で「大飯原発を動かしてはならない」という判決が出た。そのロジックというのはすごく簡単。法律上、経済的価値と人間の基本的な人権のどちらが大切かといえば、基本的人権のほうが上だ、重要なんだと。

それを(下敷きに)して福島原発事故を考えてみると、たかだか電気のためにここまで危険なことをするのか。ほかに選べる手段がなければ仕方がないが、ほかに選べる手段があったのだからだめだね、というのが裁判所の考え方。しかも、原発は事故を起こすということがはっきりわかってしまったんだから・・・。

電力会社は、地球温暖化がどうの、国にとって(燃料費が)大きな赤字になるとか並べるが、それは関係ないとびしゃりと切り、だから再稼働は認められないとしたのだ。

「みゆきのあと」—明治天皇と多摩—展示会

多摩市には聖蹟桜ヶ丘駅、行幸橋、旧多摩聖蹟記念館など、皇室と関わりのある名称がいくつか残されているが、それらは明治14年から明治天皇が行幸されたほか、皇族も何人も訪れとくに連光寺地区を中心に観桜などを楽しまれたことによる。



現在、パルテノン多摩では、宮内庁に残されている公文書と地域に残された資料をまとめて、めずらしいコラボレーションによる標記の特別展示会が開かれている。

「みゆき」とは天皇が外出されることで、「行幸」または「御幸」と書く。明治天皇は明治14年(1881)2月以来、神奈川県南多摩郡連光寺村(現・東京都多摩市内)に4度にわたって行幸された。明治天皇は同地で兔狩りや鮎漁を展覧され、明治15年には「連光寺村御猟場」(設置当初の正式名称は御遊猟場)が連光寺村を中心とする区域に設定され、大正6年(1917)まで存続していた。

この展示会は、天皇の側近が猟場を調査しに出かけるころから、猟場の地図、乗馬姿の天皇像、その服装や馬具、鮎漁に使われた道具、休憩所に使われた富澤家の屋敷(写真)まで幅広い内容の展示が行われている。(←旧多摩聖蹟記念館=教育委員会パンフより)

